鶴岡＝デリヴランドの黒い聖母像～造形と歴史～

On the "Vierge Noire" at Tsuruoka Catholic Church from Délivrande(France)

安發 和彰
AWA Kazuaki

Tsuruoka Catholic Church, constructed in an European Romanesque basilica and dedicated to Virgin Mary, was consecrated at 1903. From that time, in the basilica, the statue of the Virgin with Infant Christ that was made in and sent from Douvre le Délivrande (Normandy, France) has been an object of veneration for the faithful and pilgrimages over 100 years. It is also an work of art, curved in wood (h.123cm) and richly colored (gilded and painted in blue, red, white etc.) of the end of 19th century. But this statue is one of the many copies from the original work, curved in stone, of 16th century.

It is called "Vierge Noire" (=Black Virgin; Kuroi Seibo in Japanese), because the faces of Mary and the Son were painted in dark-brown, and there is no other life-sized statue of "Vierge Noire" in Japan. In this following paper, I will show ① the details why and how the statue was sent to Tsuruoka Catholic Church from Délivrande, ② how about the iconography of the statue, and ③ on the origins, histories, legends of the "Vierge Noire" of Délivrande, comparing with other statues of "Vierge Noire" remained today in France, especially the ones of Chartres, Orléans and so on.

はじめに

山形県鶴岡市（馬場町７丁目９番地）のカトリック教会では、1903（明治36）年の献堂以来、南側の副祭壇上に、御子イエスを抱く聖母マリア立像が安置され、100年以上にわたって人びとの崇敬を受けてきている。今日もほの暗い堂内でその前に立って見上げると、それは、肩の小さい慎ましやかな形姿とうつむく表情に、敬虔さをそなえた厳粛な雰囲気が漂うのが感じられる聖母像である（図１、２）。

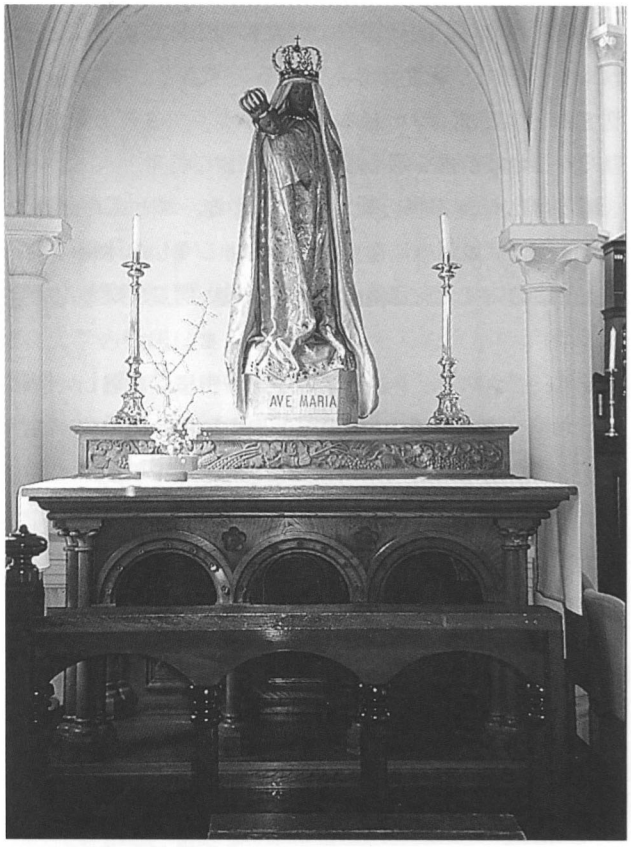

図１　鶴岡カトリック教会の「黒い聖母」

台座（20cm余り）を含む高さ143cm程（冠を除く）のこの木彫像は、全体が彩色され、御子、マリアとも顔面の肌が褐色に塗られた、いわゆる「黒い聖母」（仏語 Vierge Noire）の一作例である。旧約聖書の『雅歌』（第１章）に「私は（日に焼けて）黒い。けれども美しい。」と歌われた、このような肌の黒い、または褐色で小麦色の聖母像は、ヨーロッパのキリスト教世界では、フランスを中心に、記録上あるいは検証を経て、早ければ11世紀のロマネスク時代から存在したとみなされ、これまで160体～200体程の遺例が確認されている[1]。中世から今日まで、夥しい数の聖母彫像が生み出されてきたことをふりかえれば、これまで調査の対象となった「黒い聖母」はいかにも数が少なく、特殊なグループを形成している。また鶴岡の作のように、立像で等身大に近い黒い聖母像は、フランスでも特異で、さらに日本国内では、おそらく他に残存作例が見られない貴重なものである。

鶴岡カトリック教会の本像は、もともとは、フランス北部ノルマンディー地方の（ドゥーヴル・ル・）デリヴランドに12世紀以来伝わったとされる「黒い聖母」のコピーで、当初の彫像が破壊された後の16世紀の復原像（石彫）が、19世紀末に模刻（木彫）されて、それが遠く海路を経て、鶴岡に贈られたものであった。デリヴランドは、古来、先住ケルト族の集落であったのが、古代ローマ帝国の治下にはいり、中世も早々にキリスト教の町とされ、12世紀以降には、この「黒い聖母」のもとに聖母崇敬の巡礼が集う聖地となった歴史を誇っている。

そもそも、全般的に「黒い聖母」の起源や歴史、黒色の意味などについては、伝説や歴史的記述が錯綜し、さらに彫像の破壊、焼失や復原、コピー、黒色の塗り直しや洗浄がくりかえされたことなどもあって、各方面で調査がすすんだ現在でも、解明されない謎が少なからず残されている。それは、デリヴランドの「黒い聖母」に関しても同様である。しかし、簡単にでもデリヴランドの黒い聖母像の経歴をふりかえってみると、実際、そこには、広くフランスの「黒い聖母」にまつわる歴史の典型的一例をみることができる。伝説のなか、土着の地母神像に端を発し、さまざまな戦乱の時代をくぐりぬけ、17世紀からあらためて注目を集め、19世紀後半以来さらなる篤い崇敬を受けることになったのは、フランスで最も多くの聖母巡礼を集めるシャルトルの黒い聖母像（２体＝「地下の聖母」と「柱の聖母」）の歴史と重なるのである。

以下本稿では、鶴岡の模刻像の造形をあらためて確認し、シャルトルをはじめ他の「黒い聖母」とも比較しながら、鶴岡＝デリヴランドの聖母像の伝統性や歴史的意義の一端を明らかにしようと思う。なお、この鶴岡＝デリヴランドの聖母像は、随所に経年劣化がすすんでいるため（木材の亀裂、虫食いおよび塗装の剥落等）、2007年３月から本学の文化財保存修復センターに移管され、現在、科学的調査を経たうえでの修復が実施されている（2008年３月に完了予定）。

１．鶴岡カトリック教会の黒い聖母像

鶴岡のカトリック教会は、1885年、故国から当地に派遣されてキリスト教の布教に努めたフランス人ダリベル神父が購入した、もと庄内藩家老末松十蔵の屋敷跡（1172坪）に建設が計画され、1902年６月着工された。竣工の1903年10月11日、ノートル・ダムすなわち聖母マリアに捧げられたこの聖堂は、近年（1994年）にも、屋根や壁体の塗装工事、鐘塔および「窓絵」（擬似ステンドグラス）の補修がくりかえしなされたが、おおむね創建当時の形姿をとどめている。その構成は、東に入口を設け、西側に儀式と祈りの中心である主祭壇を置く、長方形平面のいわゆるバシリカ式で、ヨーロッパの11世紀以来のロマネスク様式を踏襲した、主祭壇前の中央身廊と南北の側廊から成る三廊形式である。主祭壇を設置するアプシスの前方を広く至聖所とし、また入口２階上に鐘塔を頂くのが特徴的である（図３、４）。建設は、フランス人パ

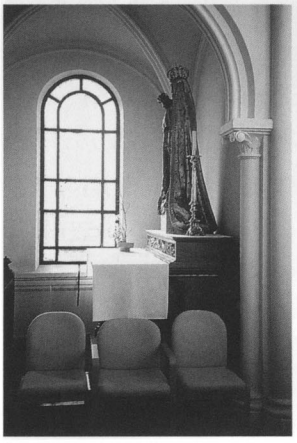

図２　鶴岡カトリック教会の「黒い聖母」（側面）

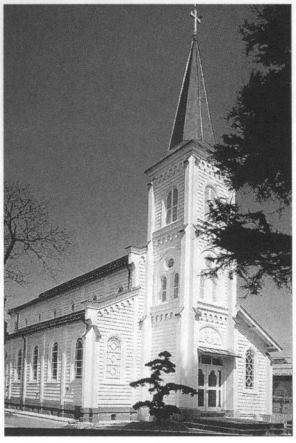

図３　鶴岡カトリック教会（外観）

ピノ神父の設計に基づき、鶴岡の材木商森田三郎右衛門、大工相馬富太郎の手になった。このパピノ神父は、1886年に来日し、東京・京都・仙台などで6件のヨーロッパ風のキリスト教聖堂建築を手がけ、1911年に日本を離れていて、鶴岡のカトリック教会が日本における最後の設計だった[2]。聖堂の工法は、木造瓦葺きで、内部は板張り畳敷きである。日本の生活習慣にあわせて、信徒たちが身廊床の畳の上に直に坐って儀式に参加し、祈りを捧げるように構想されていた（現在は椅子式）。内部では、とくに幅の広い中央身廊に、ひときわ高く6つの4分リブ・ヴォールト式天井が架けられ、それが、至聖所にまでおよぶ身廊壁の大きな半円アーチ列とあいまって、聖堂内部全体に、力強く、堂々と安定したリズムを刻む重厚な空間を生み出しているのがきわめて印象的である。

私たちの黒い聖母像は、堂内で、床面が一段高い至聖所の南端の一角に設けられた副祭壇の上に安置されている（図5）。もともと1903年の献堂当初からこの場所に置かれていたようで、当時の記録に「…（主）祭壇の左側に、デリヴランドの聖母マリアの金色燦然たる御像を安置し、生花を飾り、蝋燭を灯して、一目で聖母マリアの教会であることを示している。…」と書かれている[3]。こうした聖母像の堂内配置は、元来のデリヴランドのノートル・ダム聖堂でも同様であった（図6）。他のヨーロッパの聖堂でも、記録としてシャルトルの各種の『年代記』などで何度も書き残されたように、伝統的に、たとえ主祭壇を中心に聖堂内で儀式が行われているときでも、それを妨げることなく、巡礼や信徒たちがいつでも、聖母像の直前に寄って、聖母に崇敬の祈りを捧げることができるように意図された配置なのである[4]。

さて、鶴岡の黒い聖母像の造像を見てみると、この像は、等身大より小さく、痩身で、右手で右胸の前に幼児イエスを抱いてうつむく、正面向き立像である。「黒い聖母」と呼ばれる所以である褐色の顔は（図7）、眉・瞳・下睫が黒色でペイントされ、赤い唇を静かに閉じている。鼻筋の通った面立ちの全体に、私たちは、もはや中世的ではない、模刻時の19世紀末の理想主義的傾向をおびたネオ・ゴシック風な写実表現を認めるべきだろう。それにしても、聖母の褐色の肌が、伏し目がちの厳粛な視線とあいまって、「黒い聖母」に独特な神秘的雰囲気を醸し出しているのが感じられる。

実際、聖母のうつむいた視線は、現場の祭壇の前で跪

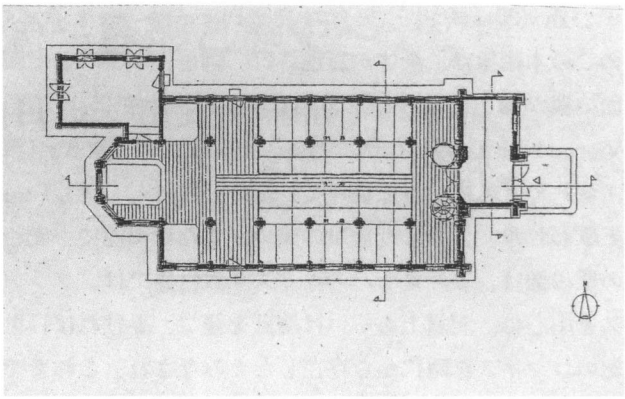

図4　鶴岡カトリック教会（平面図）

図5　鶴岡カトリック教会（内部）

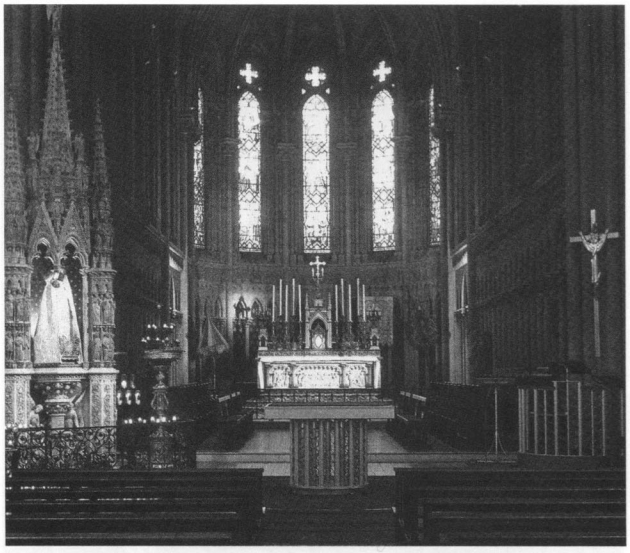

図6　デリヴランドのノートル・ダム聖堂（内部）

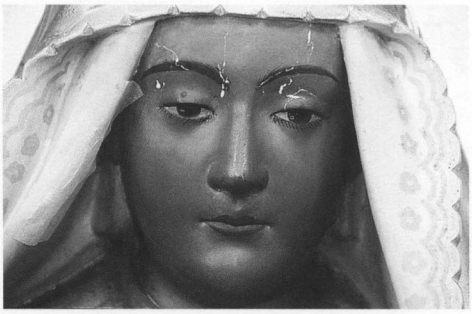

図7　鶴岡カトリック教会の「黒い聖母」

いて祈りを捧げる人びとのこの像を見上げる視線と交わり、人びとの注意を聖母に集中させる。一方、聖母と同様に肌が褐色に塗られた御子イエスは、やや優雅なリアリスムの名残をとどめる表情で表され、その視線は礼拝者には向けられず、無限の彼方を見ているようである（図８）。実は、フランスを中心に残る中世以来のヨーロッパの「黒い聖母」では、御子を膝の上に抱く正面向きの座像が圧倒的に多く[5]、立像作品はそもそも例外的で、しかも時代の新しい作が多くて比較が難しいのだが、例えばフランス中央山岳部の町マルサに残る典型的な「黒い聖母」座像（木彫像で高さ80cm、12世紀後半の作。黒色ペイントと金箔は1830年に塗り直された＝図９）では、聖母、御子とも威厳のある視線を正面に向けていて、その視線は、現場で、聖堂空間を貫き、そこに集う人びとの祈りを集約する。稀少な立像の作例のなかでは、モーリアックの聖母像が（高さ114cm、18世紀末に破壊されたのを復原）、聖母は正面を、イエスは上方を見上げている。また同類のオルレアンの立像では（高さ130cm、伝説では９世紀以前の「奇蹟の黒い聖母」と呼ばれた木彫像が、1562年に焼かれたのを16世紀末に黒石像で復原＝図10）、鶴岡の像と同様、右手で御子を右胸前に抱いた聖母がうつむき、右掌に宝珠（「宇宙」のシンボル）を持つイエスは、別の方向に視線をおくっている。こうした場合、像を前にした人びとは、鶴岡の聖堂におけるのと同様、聖母と直に視線を交え、聖母への崇敬の思いを募らせ、祈りと瞑想に没入することができるのである。

鶴岡の模刻作品では、聖母は、植物モティーフで構成された薄い鉄製で大型の冠を頂き（御子イエスも同様の冠をかぶる）、全身を覆うマントが、金箔に輝きながら、頭部でヴェール状にかかり、両肩から背中、足元、台座まで垂れている。また、聖母は、薄青色の長衣（チュニカ）を身に着け、その裾の金箔の縁取りには、宝石を模した色ガラス玉が象嵌されている。さらにこれら着衣には、全面的に、型押しやペイントで、アカンサスの葉、白百合や棘のない薔薇、それに雛菊の花などがさかんに表されて、像全体を活気づけている（図11、12）。こうした植物モティーフは、古来、清浄無垢で原罪の痛みをまぬがれた聖なるマリアの象徴なのであった。こうしてみると、入念な細工の大きな冠、金箔のマント、装飾入りの豪華なチュニカは、いずれも、マリアに、輝かしい

図８　鶴岡カトリック教会の「黒い聖母」

図９　マルサの「黒い聖母」

図10　オルレアンの「奇蹟の黒い聖母」

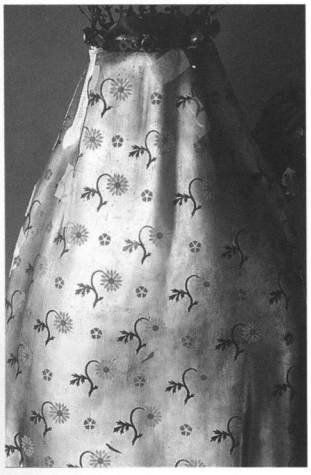

図11　鶴岡カトリック教会の「黒い聖母」

図12　鶴岡カトリック教会の「黒い聖母」

神の恩寵が与えられているのを暗示しながら、同時にまた、マリアをイエスの母、すなわち神の母（テオトコス）にふさわしい、荘厳なる彫像に高める効果をもたらしている。また、御子イエスは、聖母のチュニカと同じ布をマント状に身につけているようであり、そこには、「受難」の流血の死のシンボルである薊（あざみ）の文様が表されている。

なお、この御子イエスは、聖母の右手に抱かれ、頭部を左側に傾けており、とくに「黒い聖母」では例外的な表現である。それにしても、身体表現については、この御子もそれを抱く聖母も、着衣の下に隠された身体は、胴体も手足も、その立体的起伏が曖昧に暗示されるにとどまっていて、全体的に不合理で不自然な印象を私たちに与えている。とりわけイエスの身体性は見分けることができず、まるでマリアの胸からイエスの頭が飛び出しているかのようである（図13）。しかし、こうした奇異とも言える身体表現には、明確な契機があったと推測される。もともと「黒い聖母」に限らず、ヨーロッパの聖母像では、中世以降、御子を抱く聖母像で、実際、像全体に、別誂えの、頭と手先をくりぬいた、重厚で豪華な刺繍入りの布（多くは絹）製のローブやマントを着せかけて、豪華で荘厳に飾る慣習が一般化していた。例えば、シャルトルの「柱の聖母」も古くからローブが着せられていた（木彫像はもと13世紀はじめの作。15世紀にこの像に金羅紗のマントが贈られた記録が残り、17世紀以降の記録的版画では、常に聖母も御子もローブやマントをまとった像として表されている）（図14）。ちなみにこのローブやマントは、像にペチコート風の補材を装着して、その上から着せかけていたのだった[6]。またエールの像の場合は（木彫像は高さ58cm、12世紀の作）、御子イエスに聖母と別のローブを着せている（図15）。いずれにしても、聖母と御子の黒い頭部と手先のみが、釣り鐘型をなすローブから突出し、それらの身体表現はローブの下に覆い隠されている。広く各地に残るこうした実例と比較すれば、聖母も御子も身体表現が曖昧な、デリヴランド伝来の鶴岡の模刻聖母像は、もともとの16世紀の復原石像に、このエールのような、布製のローブやマントを着せて（イエスにはマントを纏わせる）飾ったものをモデルとし、それ全体を彫刻として表現したものだったと考えてもよいだろう[7]。もとよりデリヴランドのノートル・ダム聖堂にも、17世紀はじめ以降に黒い聖母像の

図13　鶴岡カトリック教会の「黒い聖母」

図14　シャルトル大聖堂の「柱の聖母」

図15　エールの「黒い聖母」

図16　デリヴランドの「黒い聖母」を表した版画（17世紀）ノルマンディー美術館

ために寄進された豪華な絹製のローブやマントが数多く残され、それらを着せかけた聖母像を表した版画も、機会あるたびに刻まれている（図16）。デリヴランドでも、遅くとも17世紀以来現在まで、恒常的に聖母像にいとも華麗なローブやマントを着せかけて、いっそう荘厳な雰囲気を盛り上げていたのであった（図17、18）[8]。

2．デリヴランドの黒い聖母像

さて、この聖母像が遠路、困難な道のりを経て寄贈されたのは、パリから派遣されて鶴岡にキリスト教を布教した、ダリベル神父に縁のあったノルマンディー地方の町デリヴランドからだった。神父は、デリヴランド近在のコーヴィル出身だったのである。ヨーロッパの「黒い聖母」は、フランスでも、マルサやモーリアックの位置する中央山岳部に数多く集中し、南はエール他のピレネー山脈にかかる一帯にも広がりをみせている。そのピレネーのスペイン側では、やはり岩山の山塊中に位置するモンセラに、伝説に富み、多くの巡礼をひきつけ、篤い崇敬を集めた黒い聖母像が残されている[9]（図19）。フランス北部では、デリヴランドの他に、大天使ミカエル降臨の聖地モン・サン・ミシェル、イル・ド・フランスのシャルトルやパリ、またオルレアンなどに貴重な作が伝わっていた。しかし、パリのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院の彫像は、修道院長ブリソンネーのもとで、エジプトの異教の女神イシス像とみなされて1514年に焼き捨てられ、モン・サン・ミシェルの「三十本の大蝋燭礼拝堂」に安置されていた「地下の（黒い）聖母」像も、1790年のフランス大革命で、「アンシャン・レジーム（旧体制）」の象徴として、民衆の手によって破壊され失われてしまったのだった[10]。

私たちのデリヴランドでは、おそらく早くから「黒い聖母」の存在が知られ、聖母崇敬の巡礼を集め、像が破壊された後も、それが復原されて今日に至っているのである。デリヴランドの歴史をふりかえってみると、もともとヨーロッパの先住民族ケルトの宗教的な「聖なる森」を擁した集落が、ローマ化されてあったところに、6～7世紀はじめにキリスト教が伝わり、すでに620年頃には聖母崇敬の地として知られ、9世紀に、かつてのガロ・ローマの神殿を改築して、今のノートル・ダム聖堂

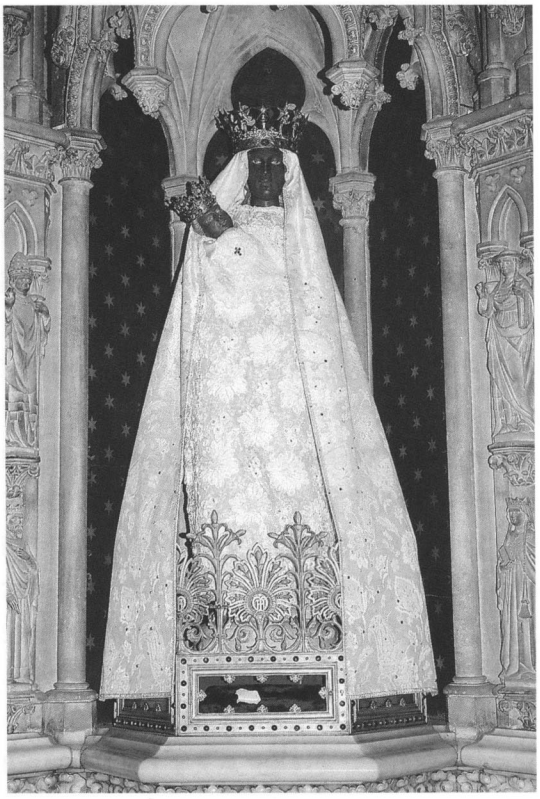

図17　デリヴランドの「黒い聖母」（現状）（藤原徹撮影）

図18　デリヴランドの「黒い聖母」（藤原徹撮影）

の起源が創設されたといわれる。その直後（830～840年頃）、北方ノルマン人＝ヴァイキングが侵略してこれを破壊し、それがそのまま放置されて廃墟になっていたのを、危機の時代を乗り越えた11世紀末～12世紀初頭に、キリスト教徒たちが再建したのだった。その扉口の石造アーチの一部が現存している。そしてこの再興のとき、聖堂の廃墟のなかから、以前のケルトの地母神像が奇跡的に（伝説では「羊が掘り出して」）発見され、それをキリスト教の聖母像として、あらためて新聖堂に収め、崇敬の対象としたというのである。デリヴランドの聖母は、オリエントの異教の地で捕らわれた人びとを解放し、盲目の人の目を開き、暴風を鎮めて船乗りを救い、家畜や作物の多産・豊穣、妊婦の安産を保証し、死産の赤子の霊を（洗礼を授けた後）天上に引き上げ、常に子供たちを守護したと喧伝されてゆくのである[11]。そしてそれ故に、多くの人びとを引き寄せ、早くも12～13世紀には、デリヴランドが、広くヨーロッパでも、聖ペトロのローマや聖大ヤコブ（＝サンティアゴ）のコンポステーラ（スペイン）にも比肩される、当代有数の巡礼を集める「聖母の聖地」に成り上がったとまでいわれている[12]。その後は、黒い聖母像に執心したフランス王ルイ11世（1461-1483年在位）が、デリヴランドに巡礼して、その聖地を拡張し、聖堂を建てなおさせたりもしている[13]。デリヴランドの現在のノートル・ダム聖堂は、19世紀に大改築され、1895年８月22日に献堂式が挙行されていた（図20、21）。

デリヴランドの町の歴史と像の「習合」の伝説は、比較してみれば、古くからの聖母の聖地シャルトルと重なる。シャルトルも、もとはケルト族の一大中心地だったのが、ローマ化された後にキリスト教が布教され、東方で奇蹟的に残されたマリアの着衣の布端が贈られてから（876年）、当時のキリスト教フランク王国でも随一のマリア崇敬の拠点となったのだった。そして、シャルトルでもかねてから、かつて傍の洞窟にあった、ケルトの宗教＝ドルイッド教の豊穣や多産を祈願する地母神像が、御子を抱く聖母マリアの像とされて旧来の地下聖堂に置かれ、「ノートル・ダム・ス・テール（＝地下の聖母）」と呼ばれて、中世から敬われてきたと考えられていたのだった[14]。

しかし、こうした伝説のなかに歴史的事実を認めるにしても、シャルトルやデリヴランドのケルト伝来の地母

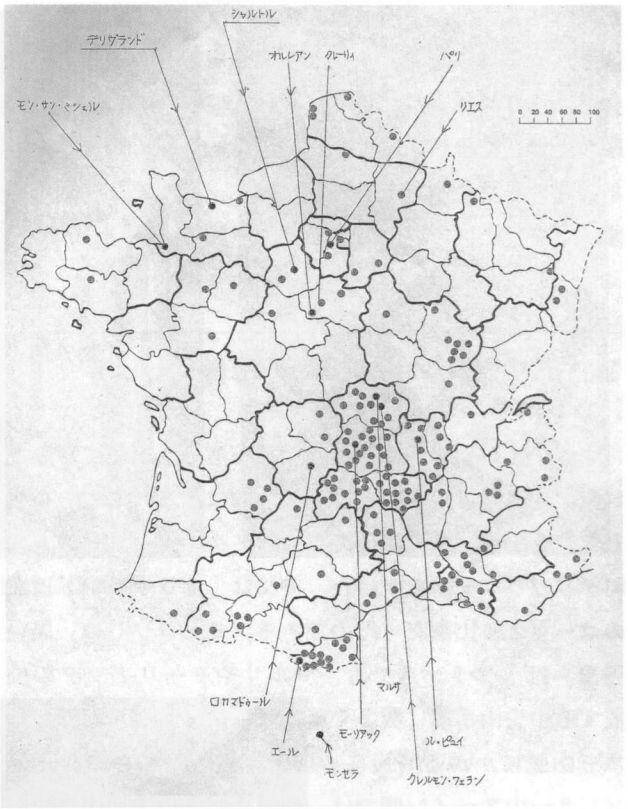

図19　E．サイヤンによる「1550年頃フランスの黒い聖母像の所在地」

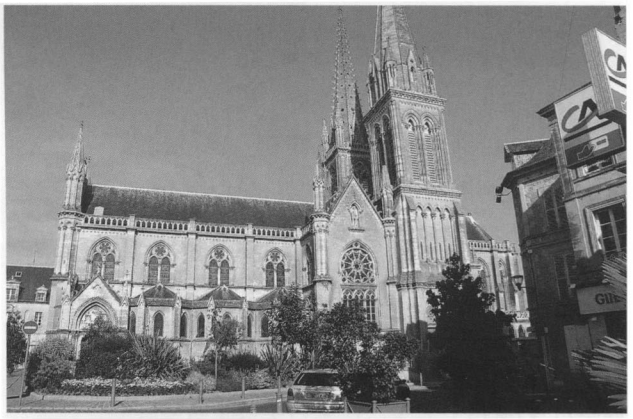

図20　デリヴランドのノートル・ダム聖堂（外観）（藤原徹撮影）

神を受け継いだ聖母像が、実際に黒い、あるいは褐色の肌の像だったのか、またそれがどのような形姿だったのかは、もはや私たちには判然としない謎である。デリヴランドの聖母像が、いつから「黒い聖母」として知られるようになったのかも決定づけられない[15]。広くフランスで中世の間に書かれて、残された歴史的記述（年代記や巡礼訪問記、教会や修道院の財産目録等）では、具体的に「肌の黒い」聖母彫像についての記録は、16世紀以

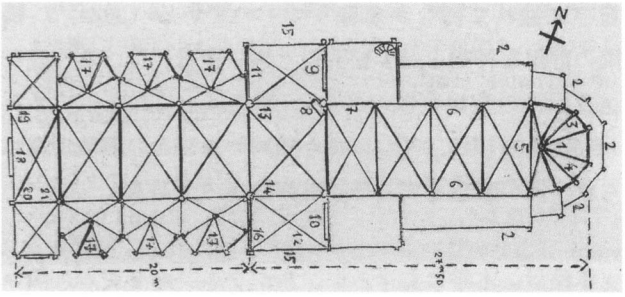

図21　デリヴランドのノートル・ダム聖堂（平面図）

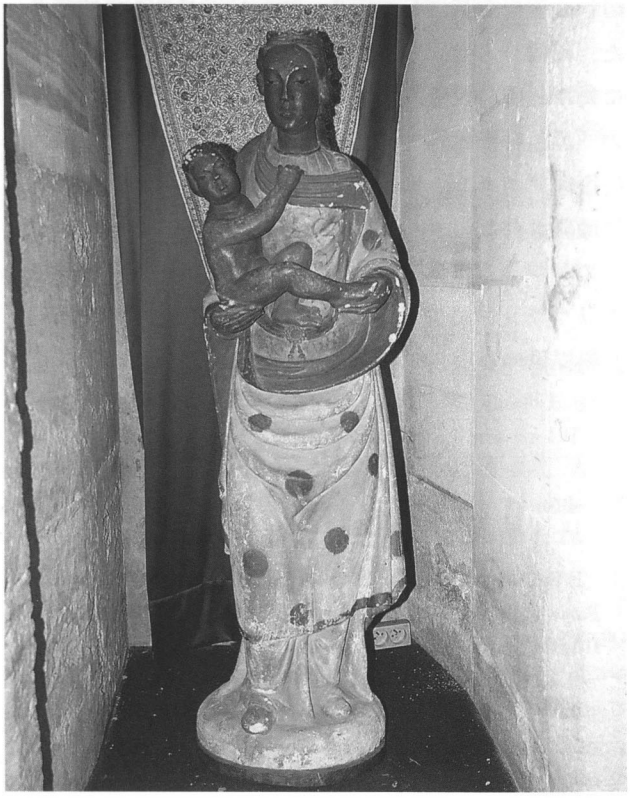

図22　デリヴランドの「黒い聖母」模刻像（19世紀？）ノートル・ダム聖堂（藤原徹撮影）

図23　『巡礼たちの聖心の礼拝を受けるデリヴランドの聖母』（19世紀？）版画

前までは溯らないとされてきている。例えば、シャルトル地下聖堂の聖母像が「黒い」のに注目した記録がみられるのは、17世紀になってからのことであった[16]。

ともあれ、デリヴランドの「黒い聖母」に関しては、16世紀になってそれが「破壊された」記録が残される。16世紀初頭のマルティン・ルター等に始まる、プロテスタントのカトリック教会に対する攻撃は、聖母マリアへの過剰な栄光化と崇敬に向けられ、とくに数々の民間信仰的な伝説につつまれ、各地で秘儀的な儀式が執行されていた「黒い聖母」が、異教的な「supersutition gothique（野蛮な迷信）」とみなされて破壊の目標とされたのだった[17]。デリヴランドの「黒い聖母」は、1561年３月に壊されてしまったし、翌1562年には、オルレアンの町の広場で２体の黒い聖母像（オルレアンの「奇蹟の聖母」とかつてルイ11世が崇敬を捧げたクレーリィの聖母）が、カルヴァン派の人びとによって焼かれている[18]。しかし、その20年後、カトリック教会の反撃のなかで、1580年、デリヴランドの「黒い聖母」は、石彫で復原され、あらためて聖堂に収められたとされている[19]。

デリヴランドのこの黒い聖母石彫像は、像高123cmの立像で、聖母と御子の露出した顔面は褐色に塗られている。通常着せかけの布製のローブやマントを取り除いた模刻像（ノートル・ダム聖堂蔵、19世紀？＝図22）や版画（『巡礼たちの聖心の礼拝を受けるデリヴランドの聖母』個人蔵、19世紀？＝図23）などで確認すれば、伏し目がちの聖母は、幅広のチュニカをまとい、頭部から足先までを覆うマントを身につけた姿で彫り出されている。右腕で幼児イエスを右胸前に抱き、左手をイエスの右足にそえる。裸体のイエスは、聖母の右肩のマントに片手を掛け、聖母の右腕を「玉座」として坐すかのようである。それは、まさに、やはり16世紀末に復原されたオルレアンの「奇蹟の黒い聖母」（図10）と同様の図像なのであった。

その後、1854年12月８日にヴァティカンのカトリック教皇ピウス９世の勅書で、聖母にまつわる「無原罪の御宿り」の教義が認められると、フランス全土で聖母崇敬の気運があらたな高まりをみせた。これは、聖母マリア自身が、母アンナの胎内に原罪の汚れなく懐胎されたとする、生まれながらのマリアの純潔を普遍化した内容の教義であった。この頃以降、そのマリアのいとも純潔なる天上性を讃えて、聖母像に栄光の冠をかぶせる戴冠の

儀式が各地で催された。シャルトルでは早々の1855年５月31日、「柱の聖母」像に、デリヴランドでは、遅ればせながら1895年８月22日、黒い聖母像に豪華な冠が捧げられたのだった。そしてデリヴランドでは、この戴冠式に際して、「黒い聖母」の模刻像を石膏や木彫で制作し、その像を掲げて行進の儀式を盛大に挙行したといわれている。このとき造られた幾体かの模刻像のうちの１体が、ダリベル神父の縁あって、海を渡って私たちの鶴岡のカトリック教会に送られて来たということであった[20]。

おわりに

以上を、鶴岡＝デリヴランドの「黒い聖母」の伝統性や来歴に関する私の第一次調査報告とする。最後に付言すると、今日でもヨーロッパ各地で伝統的に、聖母マリアの記念日（「聖母の命日」の８月15日、「受胎告知」の３月25日など）に、黒い聖母像にひときわ豪華なローブやマントを着せかけて荘厳化し、それを御輿に載せて聖堂の外に持ち出して、街の通りや記念の場所を巡る行列儀式が行われている。デリヴランドでも、そのときの聖母像は、聖母讃歌を歌う人びとたちとともに、厳粛かつ喜びに溢れて街なかを練り歩くのである（図24）[21]。鶴岡の静粛な神秘と謎を秘めた「黒い聖母」は、こうしたフランスの聖母崇敬の息吹を100年以上にわたって私たちに伝えつづけ、そこにまた鶴岡の人びとの尊敬が重ねられ、深い瞑想を育んできた彫像なのである。

図24　デリヴランドにおける「黒い聖母」の行列儀式（1901年）の記録写真

本稿は、本学におけるシンポジウム『海を渡った黒い聖母～フランスから鶴岡へ』（2007年７月14日開催）での私の報告を基にしている。同シンポジウムで披瀝された、鶴岡カトリック教会司祭本間研二氏の「黒い聖母」に対する深い畏敬、お茶の水女子大学名誉教授柳宗玄氏の「黒色の根元的力」をめぐる鋭敏な洞察、フランス人修復家アニエス・カシオ氏の詳細な観察と分析には大いに触発された。また、鶴岡の黒い聖母像の修復を担当し、このシンポジウムを企画した本学の藤原徹教授からは、デリヴランドにおける実地調査の成果も含めて、適宜、資料提供のみならず、貴重な助言をいただいた。

註

1　E.Saillens（1945年）《Nos Vierges Noires ～ Leures origines》Paris には、「1550年頃フランスの黒い聖母像の所在地」として161箇所があげられ、Jaques Bovin（1988年）《Vierges Noires ～ La réponse vient de la Terre》Paris には、全266体（散逸を含む）の解説リストが掲載されている。Sophie Cassagnes-Brouquet（2000年）《Vierges Noires》Ródez は、現存作例118体をリスト化している。

2　鶴岡カトリック教会については、荻原泉（1996年）『天主堂を仰ぎ見て』鶴岡カトリック教会刊（特にpp.58-78）、同（1966年）『神の子羊～鶴岡カトリック教会略史』同刊を参照。なお、鶴岡カトリック教会の聖堂建築は、1973年に山形県の有形文化財、1979年に国の重要文化財に指定されている。

3　池田清秀の報告『公教会々友會雑誌』1903（明治36）年11月号。荻原『天主堂～』pp.85-88を参照。

4　例えば、シャルトル聖堂の年代記作者Sebastien Roulliardは、「（シャルトルのカテドラルでは）高廊の前の北側に頑丈な石の円柱が立てられ、そのうえに玉座が設けられて聖母像が安置されている。…それで内陣で行われる儀式を妨げることなく、（聖母は、その場所で）あらゆる人びとの崇敬を受けることが出来る。きわめて多くの群衆がそこ（聖母像の前）に集い、その崇敬も絶大で、（人びとが）石柱に接吻するので、そこには窪みができている。」Parthénie1609年（『シャルトル聖堂のいとも荘厳なる年代記』）と記している。cf. Yves Delaporte（1965年）《Les 3 Notre-Dame de la Cathedrale de Chartres》Chartres, p.36

5　もともと「黒い聖母」の起源的彫像は、聖母が玉座に正面向きで座し、膝のうえに御子イエス・キリストを抱く、いわゆる「荘厳のマリア」像だったとされている。Émile Mâle（1922年）《L'art religieux au 12e siècle》Paris＝エミール・マール（田中仁彦他訳）（1996年）『ロマネスクの図像学』（下）国書刊行会、Manuel Trens（1947年）《Iconografía de la Virgen en el arte español》Madrid , 柳宗玄（2007年）『ロマネスク彫刻の形態学』八坂書房（pp.31-34他＝『みづゑ』1964年1月号初出）、Irene Forsyth（1972年）《The Thron of Wisdom》Princeton,柳宗玄（1986年）『黒い聖母』福武書店、田中仁彦（1993年）『黒マリアの謎』岩波書店、馬杉宗夫（1996年）『黒い聖母と悪魔の謎』講談社現代新書、他。

6　その手法についてはTrens p.641を参照。

7　フランス人修復家アニエス・カシオも、鶴岡の黒い聖母像についての報告『フランスにおける木彫彩色の技法と修復』（2007年7月14日）のなかで、同じ所見を述べた。

8　Michel Le Tellier etc.（1999年）《Le pèlerinage et la basilique de Notre Dame de la Délivrande》Caen, pp. 53-etc.

9　図19の地図はE.Saillensによる。Cf.Brouquet p.16

10　Brouquet p. 223, p. 230, 田中 p. 82, p.149.

11　デリヴランドの歴史とその聖母の奇蹟、「黒い聖母」については、Michel Le Tellier etc. pp.7-23, p.36 etc.の他、荻原『天主堂～』pp.153-164,『神の～』pp. 208-210, pp.220-222. Jaque Huynen（1972年）《L'Énigme des Vierges Noires》Paris pp.197-198, Bovin p.59, p.230, Brouquet p.25, p.204, p.227.を参照。なお、もともとデリヴランドDélivrandeとは、古語Delle-Yvrande（フランス語delivrance＝「解放」「救助」の語源）に発している。cf.Michel Le Tellier etc. p.11, Huynen p.198.

12　Huynen p.198.

13　ルイ11世は、「黒い聖母」の聖地を巡歴して、さかんに寄進、援助をくりかえしていた。デリヴランドには、1470年と1473年の２度、巡礼に訪れている。また自分の墓碑をクレーリィ（ロワレ県、オルレアン近在）の黒い聖母像を擁するノートル・ダム聖堂に設置させている。cf. Bovin p.258, Bouquet p.225. Michel Le Teller etc. pp.14-

14　シャルトル聖堂の「黒い聖母」については、とくにDelaporte pp.9-60, Forsyth pp.105-112等の他に、馬杉宗夫（2000年）『シャルトル大聖堂』八坂書房pp.62-69等を参照。

15　Huynen（p.198）は、12世紀以来のデリヴランドの聖母像が、さまざまな記録と照合すれば、「黒い聖母」ではなかったと推察している。またMichel Le Tellier（p.36）は、再建のときに発見されたデリヴランドの聖母像は「荘厳の聖母」タイプの造像だったと推側している。

16　例えば「地下の聖母」について、『シャルトルの街の年代記』（1681年）の記者Alexandre Pintardは「像が黒ずんでいる」と報告している。「（シャルトル大聖堂のクリプトで）、祭壇上のニッチに安置されて崇敬を受ける彫像は、梨の木を材としているようにみえる。火が一日中ともされたろうそくやランプの油煙でよごれ、日焼けしたように黒ずんでいる。その聖母は、椅子に座り、膝の上に座す御子を抱く。御子は右手で祝福を与え、左手には宇宙を示す球を持つ。頭には何もかぶらず、髪も短い。チュニカは全身をおおい、身体にはりつき、腰のところで折り返されている。顔や手、足はむき出しで暗い褐色をしている。聖母はチュニカの上にダルマティカのような古代風のマントをまとう。そのマントは、両手の先で弧を描いて垂れさがり、膝から下には真直ぐに襞となって落ちる。頭にかぶるヴェールが両肩までたれて、背中に広がっている。顔はきわめて巧妙に作られ、楕円形の均斉がとれており、御子と同じ色である。冠はたいへん簡素で、先端の飾りはセロリの葉状をなす。椅子は四本脚で、後方二脚が高さ23プス（63cm）、前脚の高さが17プス（46cm）。足先からの像高は28プス９リニュである（77cm）。像は中空で、材の厚さは３プス（8cm）。顔は見事に仕上げられているが、それ以外は粗雑な造りである。」cf. Forsyth p.108.

17　「黒い聖母」は、各地でしばしば聖堂傍らの洞窟を礼拝所として、そこに安置されていた。また特別に緑色の蝋燭を灯したり（ムーラン）、像を葡萄酒で拭いて浄めたり（ディジョン）していたという。cf. Bovin p.63, Brouquet p.223.

18　Bovin.p.258, Brouquet pp.213-214, pp.223-225. Michel Le Tellier.p.36.

19　このときの復原の石彫像は、Michel Le Tellier（p.36）よれば、デリヴランドのノートル・ダム聖堂参事会員Pierre Gendreの手になる。

20　荻原『神の～』pp.221-222.なお当初、鶴岡には、石膏製の模刻像が送り出されたという。それが輸送中に粉砕して到着したため、あらためて木彫の模刻像がデリヴランドから輸出された。同『天主堂～』pp.156-157. デリヴランドのノートル・ダム聖堂には、他の石膏模刻像（1872年制作）が残る。cf. Michel Le Tellier etc. p. 93.

21　荻原『天主堂～』（pp.160-162）に、1995年８月、デリヴランドでの行列儀式に鶴岡からの巡礼団が参加したときのドキュメントが記されている。

執筆者

安發　和彰
AWA Kazuaki

芸術学部　美術史・文化財保存修復学科
School of Art／Department of Art History and Conservation
准教授
Associate Professor